17、18 世紀タッキリ渓周辺の族群関係と民族移動史
オランダ資料中の *Poulecheron*（*Parrougearon*）*人を中心として

清水 純

日本大学経済学部　教授

【要旨】

本稿ではオランダ東インド会社の残した文献資料を基に、17・18 世紀のタッキリ渓周辺における族群関係を考察する。この時期、オランダ人は、砂金が産出される土地に到達するためにこの地域の情報を集め、探検をおこなって記録を残した。そこに現れる族群関係の記述には、北方から交易に来る Basay 人、砂金を集める Turubiawan 族（Taraboan 人）、その近隣の Pabanangh 人、Dadangh 人、及び敵対する山地民との関係が記されている。文献に現れたこれらの人々の関係性とその変化を通して、18 世紀中葉に台湾北部の山岳地帯で起こった原住民の大規模な民族移動につらなる動きを抽出し、タロコ・タウサイの移動以前に北部台湾の山地に分布していた Poulechelon（Parrougearon）と呼ばれる族群の存在とその周辺の族群関係の性質を考察する。そして彼らの北方への移動とその顛末を、先行研究とオランダ資料の中の断片的な記述から再構成すると、セデク群が Mək-qaulin と呼んだタッキリ渓付近の先住民が Poulechelon 人であり、彼らが、宜蘭猴々社の祖先であると推測される。馬淵の推測するように、この時期には台湾全体の自然・社会環境の変化によって原住民の生業経済と居住領域のありかたが大きく変動し、テリトリーの拡大にともなう民族間の抗争の激化と民族の移動を引き起こした。東海岸の族群関係も、このような台湾全体を動かした社会変動に根差すものである。このことをふまえ、17 世紀から 18 世紀に至る民族の動態を掘り下げることにしたい。

キーワード：Parrougearon（Poulecheron） 人、Taraboan（Teraboan）人、砂金、鉄、Mək-qaulin

* 本文中のイタリック体はすべてオランダ語による表記である。

17、18 世紀立霧溪周邊族群關係與民族遷徙史
以荷蘭文獻資料中的 *Poulecheron*（*Parrougearon*）*為主

清水純

日本大學經濟學部　教授

【摘要】

本文中是根據荷蘭東印度公司殘留的文獻，進行 17、18 世紀立霧溪周邊群族關係之探討。這個時期，荷蘭人為抵達出產砂金之土地，故而收集該地域之資訊並留下探險之記錄。其中出現關於族群關係之記述當中，有來自北方進行交易的 Basay 人、為取得砂金的 Turubiawan 族(Taraboan 人)、以及其隣近的 Pabanangh 人、Dadangh 人以及與之敵對的山地居民等關係之記載。藉由出現在文獻當中的這些人之關連性及其變化，聚焦於 18 世紀中葉在台灣北部山岳地帶發生原住民大規模民族遷徙相關動向，並探討太魯閣人與陶賽人遷徙之前，分布在北台灣山地被稱為 Poulechelon（Parrougearon）的族群之存在與其周邊族群關係之性質。而根據過去之研究與荷蘭資料中的片斷記述中，再次建構 Poulechelon 人往北方遷徙之始末，可推測被賽德克族群稱為 Mək-qaulin 的、居住在立霧溪附近的原住民 Poulechelon 人是宜蘭猴猴社之祖先。如馬淵先生之推測，由於此時期台灣整體的自然與社會的環境產生變化，讓原住民生計經濟與居住領域的部分有相當大的變動，隨著其領域的擴大，而引起了民族間的抗爭激化與民族的遷徙。改變整個台灣的此社會變動也影響到東海岸的族群關係。本文依此進而更加深入探討出自 17 世紀至 18 世紀的民族動態。

關鍵詞：Parrougearon（Poulecheron） 人、Taraboan（Teraboan）人、砂金、鐵、Mək-qaulin

（譯者：胡家齊）

* 本文中外文體皆為荷蘭語之標示記述。

はじめに

17 世紀、スペイン人に続いてオランダ人は、砂金の産地を求めて台湾東海岸を探検し、タッキリ渓河口の住民に関する記録を残した。そこに現れる族群関係の記述には、砂金を集めるタラボアン（*Tarraboan*、*Tarraboangh*、*Teraboan* などと表記）社の住民（トルビアワン族）のほか、交易に訪れるバサイ人、近隣の言語集団及び敵対する山地民との関係が記されている。文献に現れたこれらの人々の関係を通して、タロコ・タウサイの移動以前に北部台湾の山地に分布していた *Parrougearon* 人、あるいは *Poulecheron* 人の存在とその周辺の族群関係について考察する。そして彼らの分布と動態を、オランダ資料の中の断片的な記述から再構成する。オランダ語資料に関しては、ライデン大学の研究者 Blussé と Everts が編集し、英訳を附した“Formosan Encounter”を参考にしている（＊以下 FE と略す）。

一、17 世紀タッキリ渓周辺の民族

１．タラボアン社とその周辺の住民

17 世紀、オランダ人は花蓮のタッキリ渓河口の産金地タラボアン社に到達し、バサイ語系のトルビアワン族の住民と関係を取り結んだ。以下にオランダ東インド会社の報告書の記述を時系列に沿って拾いながら、まずは 17 世紀のタッキリ渓周辺の族群関係の復元を試みる。

1643 年、オランダ東インド会社はボーン大尉率いる探検隊を東海岸に派遣し、タッキリ渓河口に位置する産金地タラボアンに到達してその地理的位置を確認した［Blussé & Everts 2006:363-364］。

1645 年には、会社は事務長セザールの一行 443 名を東海岸の遠征と金鉱探索に送り出した［Blussé & Everts 2006：569］。セザールの軍隊は、南から行軍して産金地タラボアンに到着し、住民の歓迎を受けた［Blussé & Everts 2006：576-577］。セザールの一行は金鉱を探そうと少人数で川に沿ってできるだけ奥まで行こうとしたが、激流に阻まれて途中で進めなくなった。その途中で、3.5 マイルほど上流に遡ったところで、急峻な岩の崖に沿って登っていく原住民の通り道を見つけた。下は 2，3 段の階段が切り出してあり、その少し上には竹を切ったものが取り付けられていた。怖いもの知らずの兵士が登ってみたが、途中で引き返さなくてはならず、降りるにも落ちて死ぬ危険が大いにあった。この通り道は、タラボアンの住民の説明によれば、時々、猿の頭を持つ人々が降りてきたり、また上って行ったりするのに使われるという。この道に沿って崖を登って彼らを追いかけていくのは不可能であり、ここを上る者は、彼らに石を投げつけられて攻撃されるのである［Blussé & Everts 2000： 577-8、2006：31］。

セザールの探検記録によると、タラボアン人が猿のようだと表現している人々は、タラボアンから 7 時間歩いたところの山の中にある 1 つの村に住んでおり、彼らは弓矢で武装し、山に近づこうとする者には誰彼かまわず石を投げ落としてくるという。このため、タラボアンの人々は峡谷の奥深くに入ろうとはしないのである［Blussé & Everts 2000：30］。

1646 年、商務員ハッパルトは、会社がタラボアンに派遣していたバサイ人通訳らから現地の情報を聴取した。それによると、基隆からタッキリ渓までは山が険しく、陸路で行くのは難しい上、途中には *Parrougearon* 人がいるので危険である［Blussé & Everts 2006：71-76］。また、タラボアンとして知られている村は、3 種類の別の言語を話す別の人々を含み、この村は *Torrobouan*、*Pabanangh*、*Dadangh* とも呼ばれている。タラロマ人（アミ族）やその近隣の人々はこの村のことをタキリス（*Tackilis*）と呼んでいる。タキリスは 60～70 戸からなり、バサイ語を話す、とオランダ人は記している［Blussé & Everts 2006:74-75］。これら 3 つの呼称は、少し離れた集落の名称のようにも思われる。

そして、タラボアンからの人々と *Dadangh* からの人々は、浜辺や河口付近の砂浜で砂金を採取する。*Pabanangh* の人々だけは、昔からそうする権利が特別に認められているので川のもっと上流で採取するのだが、見つかる金はきめの粗い大きなもので、それらはそれほど大量には産出しない。また、タラボアン社の住民は山の中に金を探しに入らない。これは彼らの慣習に反しているからであり、それと同時にかれらは *Parrougearon* 人たちを恐れているからでもある。*Parrougearon* 人はといえば、彼らであれ他のいかなる余所者であれ金を探しに来ることを許さないのである［Blussé & Everts 2006：75］。

また、タラボアンから帰った通訳からの情報によると、*Parrougearon* と呼ばれる人々は山の様々な個所に住んでおり、恒久的な家を持たない。これらの人々はカバラン（宜蘭）とタラボアンから来た人々のほとんどにとっての敵である。*Parrougearon* 人は山を上り下りすることにきわめて長けており、一瞬にしてやってのける。*Parrougearon* 人の既婚の女性は 4 本の歯を抜いており（上下の顎から 2 本ずつ）、顔は、黒く塗るか、または皮膚を突いて穴をあけて染料を入れることによって飾り立てられ、ほとんど彼らの額と鼻は素肌をみせていない。そのため彼らは一見すると猿のように見えるという［Blussé & Everts 2006：75］。

この報告からは *Torrobouan* 人、*Dadangh* 人、*Pabanangh* 人は相互に敵対関係にはなく、砂金採取の占有領域を分けるという棲み分けの関係にあったことが分かる。*Pabanangh* 人がなぜ上流で採取するのかについては検討の余地があるが、筆者はこれらの言語を異にする集団がタッキリ渓河口に住みついた時期の

違いではないかと考える。中村は *Pabanangh* 人と *Parrougearon* 人との間に友好関係があったとみた［中村　1991：198］が、少なくとも報告の時点では、*Parrougearon* 人は河口に住む人々すべてと敵対しており、砂金採取場の棲み分けという慣習的合意の外にいるようにみえる。

ところで、猿の様な顔に見える入れ墨をした *Parrougearon* 人は、1646 年のハッパルトの聴取報告において、猿の頭を持つといわれた人々と同一であろう。*Parrougearon* 人の既婚女性の抜歯の本数や、顔の彩色および入れ墨の入れ方は、ほかの台湾原住民の習俗のどれとも異なる。知られている限りでは台湾原住民の抜歯は 2 本のみであり、タイヤル・セデック・タロコなどの女性の入れ墨では、鼻は素肌のままである［何 1960、宮内 1940：31-34、37-40］。

２．タッキリ渓周辺の山地原住民

スペイン人を駆逐した後、オランダ東インド会社は台湾における支配を確立すべく西部平原及び宜蘭平原の制圧に力を注いだため、東台湾への砂金探索はしばらく途絶えた。11 年後の 1657 年の夏になって、オランダ東インド会社はようやく砂金探索の船をタラボアンに派遣した［Blussé & Everts 2010: 296-303］。補佐官バルビヤーン（*Balbiaen*）一行は、宜蘭沿岸を経由して船でタラボアンに到着し、7 月 25 日から 8 月 16 日まで滞在し、住民との良好な関係を結んだ。

その探検報告には、タラボアンの村の周囲の高い山に *Poulecheron* 人が住んでいたことが記されている［Blussé & Everts 2010: 302-305］。バルビヤーンの航海の様子を記した基隆の日誌の記述を見てみよう。

宜蘭の海岸を過ぎ、セント・ローレンス湾も過ぎて、一行は急峻な崖に近づいた。その崖の下にしばらく停泊して、食べ物と飲み物を漕ぎ手に与えた。崖の頂上には *Poulecheron* 人たちの小さい貯蔵庫が見えた。バサイ人の船員は、これらの人々の村が近くに一つある、という。櫂で船を漕いで行くと、*Poulecheron* 人の小さな村が、身震いするほどの高いところにあるのを確かに見たのだった。［Blusse & Everts　2010：297］

そこはすでにタラボアンに非常に近い所であったので、バルビヤーンは一行が間もなく到着することをタラボアンの首長に知らせるために銃を一発発射した。*Poulecheron* 人たちもこれを聞きつけたため、オランダ人たちは彼らが山の高いところで変な風に跳んだり跳ねたりしているのを見た。それから彼らはさらに船を進めて、崖を通り過ぎると、まもなく彼らは狭い小川のある、大砲の着弾距離ぐらいの広さ（筆者注：約 3 海里＝5.5 ㎞）の静かな砂地の湾に入ったのだが、ここはタラボアンから約半時間のところにある［Blussé & Everts 2010：297］。

以上は、清水断崖から崇徳湾にかけての区域の記述と思われる。静かな砂地の入り江（崇徳湾）に船をつけて上陸するのは容易だったが、一行はそこには接岸せず、タラボアン村の沖まで漕いで行き、ひどい砕け波のなかをわざわざ泳いで上陸した。砂地の入り江は、タラボアン人たちが以前そこで毎日 *Poulecheron* 人と戦っていた場所であるため、運のよくない場所とみなされていたらしい［Blussé & Everts 2010：297］。

Poulecheron 人は、ハッパルトの聴取報告に出てくる *Parrougearon* 人と同一の人々と考えられる。バルビヤーンの記述によれば、*Poulecheron* 人は清水断崖の南端に近い高山の上に小さい村を作っていて、その村は海上から目視できる上、オランダ人の撃った銃声が聞こえるほど海岸線から近い場所であった。さらに北の清水断崖の頂上には彼らの貯蔵庫があり、その活動領域が断崖に沿って北方にまで伸びていたことになる。また、崇徳の砂浜でタラボアン人と *Poulecheron* 人が毎日戦っていたという記述［Blussé & Everts 2010：297］は、村の至近距離まで *Poulecheron* 人が迫ってきていたことを示す。

バルビヤーンによると、タラボアン社の男たちは体格がよく、勇敢で強く、いつも槍と蛮刀を身に着けて武装している。少年たちも弓矢を 1 日中持ち歩いており、自分たちで射る練習をしている。タラボアン人は彼らの隣人の中に *Poulecheron* 人以外には敵はいないといっている。*Poulecheron* 人は彼らの周囲一帯を取り巻く山に住み、ときどき突然降りてきて、タラボアン人の首をとるのである。その仕返しとして、タラボアン人もまた *Poulecheron* 人を奇襲している。バルビヤーンが到着した日も大きい区画の村人たちがひとつの *Poulecheron* 人の首をとったことを祝っていた［Blussé & Everts　2010：299］。

３．1657 年のタラボアン社

バルビヤーンは、タラボアンの村には 120 戸の家があり、5 つの区域に分かれていて、それぞれに首長がおかれ、緊急の場合には容易に 500 人の戦闘員を集めることができると報告している［Blussé & Everts 2010: 296-303］。この記述は、1640 年代のオランダの記録と異なる点がある。1643 年のセザールの報告ではタラボアンの村は 70 戸足らずの家しかない。そして人口は約 450 人、その中には戦闘要員の男性が約 90－100 人いた［Blussé & Everts　2000;p.577］。

また、1646 年のハッパルトの聴取報告によると、タキリスは 60～70 戸からなる。つまり、1643～1646 年頃には 60～70 戸程度の村だったのが、1657 年には 120 戸に増えており、戦闘員の数も 500 人に増えたという［Blussé & Everts 2010：299］。10 年あまり後にこれほど人口が増えていることについて考えてみたい。仮に 1643 年に 68 戸の世帯があったとして、450 人の総人口であるならば、1 戸当たりの平均人数は 6.6 人となる。また男性人口は半数の約 225 人であるから、戦闘員が 90～100 人ならば、男性の 40～45％を戦闘要員として

動員したと考えられる。

一方、1657 年には、少年も含めて村中が武装して臨戦状態にあることがうかがえる点で、1640 年代半ばの村の様子とは少し異なっている。*Poulecheron* 人との敵対関係がこの間に激しさを増していた可能性がある。しかし 1643 年の村の人口約 450 人よりも、1657 年の村の戦闘員の数（500 人）の方が上回っているのは疑問である。防衛強化のために、年若い少年や高齢者を動員したとしても、500 人の戦闘員を確保するにはさらに大幅な人口増加が必要である。

1 戸当たりの平均人数を先ほどの計算で得られた 6.6 人のままとするなら、1657 年のタラボアンの推定人口は 792 人となるので、男性の人口は 396 人にしかならない。男性人口の 70%を動員して 500 人の戦闘員を確保するならば、男性人口は710 人以上必要になるので総人口は1400 人以上であるはずである。120 戸の戸数で人口が 1400 人なら 1 戸当たり 11.7 人の平均人数となる。または、男性人口の 60%を動員して 500 人の戦闘員を確保したならば、男性人口は 830 人以上、総人口は 1600 人以上になる。120 戸の戸数で人口が 1600 人以上なら 1 戸当たり 13 人の平均人数となる。これらの数値は末成の調査した台東県のアミ族の一村落におけるロマの平均人数のピークの時期にあたる 1929 年の 11.0 人、1939 年の 11.5 人を上回っている。つまり単純計算では 20 世紀前半のアミ族の家族が大家族形態をとっていた時の 1 戸当たりの平均人数より多くならないと説明がつかない［末成　1983：124］。［末成　1983：124］。

産業の飛躍的発展等により出生数が爆発的に増えない限り、上記のような家族平均人数の自然増加は 11 年間に急激には起こりにくいのではないだろうか。1646 年のタラボアン社に関する報告には、「住民はわりあい文明化されているが、とても貧しく惨めな様子であった。そして食べるものもあまりない。彼らはたださつまいもと少しの雑穀を植えているだけだった」［Blussé& Everts 2000：577］と記されている。平地の少ない環境でもあり、農業生産の急激な向上を背景とする短期間の人口増加は考えにくい。砂金の産出量も多くないので、交易の急な拡大条件も整っていない。そこで、戦闘員 500 人という人数にはやや誇張があると思われる。1 戸当たりの平均人数に変化がなければ、1657 年当時のタラボアンの人口は約 790 人、戦闘員は 400 人以下だったと推定される。

では、1645 年頃に 70 戸 450 人程度だった村の戸数と人口が、どのような理由で 120 戸推定 790 人まで増えたのだろうか。外部からの流入ならばありうることだが、砂金の産出量は少なく、産金が外部からの積極的な移民を呼び込む要因にはなりにくい。むしろ、共通の敵である *Poulecheron* 人に対する防御のために、例えばタラボアン、パバナン、ダダンの近隣の 3 集落が集住し 1 つの村落となったとも考えられるのではないか。村の至近距離の砂浜で戦闘が行わ

れる［Blussé & Everts 2010: 296-303］状況の下に置かれていたタラボアン社にとって、戸数の増加は防御体制の一環であった可能性を指摘したいと思う。

４．*Poulecheron* 人の分布と活動領域

オランダ資料の中には、*Poulecheron* 人と同一の族群について記したと思われるほかの資料も散見される。それらの断片をつなげてみることにより、北部山岳地帯とその周辺の族群関係の概要を再構成してみよう。

商務員プロッコイ（*Plodkhoy*）からオーフルトワーテル（*Overtwater*）行政長官への報告によると、1648 年の 2 月に淡水にやってきた 2 人のクーロン（*Coulon*）人の首長からの情報は次のようなものであったという。すなわち、中央山脈西側に分布していたクーロン人の全体的な勢力は、高山に連なる互いに遠からぬ距離にある 11 の村々からなっている。このほかに 2, 3 の村が山の中のかなり遠いところ、およそ 2 日の行程のところにあり、*Pourousouron* という名前でクーロン人に知られている。これらの人々は、全クーロン人にとってのゆゆしい敵である。つい最近この *Pourousouron* 人がクーロン人のケイナレイ（*Kijnarij*）社から首を 11 個取っていった［Blussé & Everts 2000：216］。

また、オーフルトワーテル長官からバタヴィアの東インド総督に伝えられた 1649 年の報告にもこの情報があげられている。それによると、会社と原住民の関係は、クヴァラン人との間よりもクーロンと呼ばれる 11 の小さくて強い村々のうちの 10 村との間でうまくいっている。そして金を見つけられるはずのタラボアンという台湾の東側の村と淡水との間には *Pourousouron* と呼ばれる 2 つの村だけが、まだ和平を締結しないまま残されている ［Blussé & Everts 2006：257］と記されている。

これらの報告から 10 年ほどたってから、過去の情報を整理したセザールの報告には、1648 年に *Poulo Serong* の村々の長老たちがオランダ人と和平を結びたいと偽ってやってきたという話が引用されている。*Poulo Serong* 人はタラボアン人や、クヴァラン人、バリツン（*Baritsoen*）人たちと絶えず交戦状態にあった。タラボアン人は山岳地帯の南側に、クヴァラン人は北側に住み、3 つのバリツン人の村が南西側にあったため、彼ら（*Poulo Serong* 人たち）は完全に敵によって囲まれており、オランダ人のところへやってくるためには、バリツン人と友好的な関係がなければ通行できない。しかしバリツン人といつも友好的な関係というわけではない。また、かつては一年の間の一定の期間、彼らはタラボアンとカバラン（宜蘭平原）から来た人々と交易をしていたが、彼らは互いに信頼することをはばかっていた［Blussé & Everts 2010：225 ］。

これらの記事から、1648～9 年頃、北部山岳地帯に居住していた *Pourousouron*、*Poulo Serong* という先住民が、クヴァラン人、タラボアン人、クーロン人、バ

リツン人と敵対していたことがわかる。（ただ、バリツン人の村々の方向は西か北西でなければつじつまが合わない。）一方、かつてはタラボアンとカバランから来た人々と交易していたという記述は、事実だったとすれば興味深いが、少なくとも報告当時は専ら敵対している状況があったことが、他の資料でも報告されている。

さらに約 10 年後の 1657 年～1659 年頃の記録として、*Poulecheron* 人が宜蘭平原に現れたことが記されている。1657 年 7 月 10 日の報告（基隆のピーテル・ボーンからコイエット長官宛て）によると、

何日か前、*Kittatobigaar*（筆者注：抵百葉社または抵把葉社）のクヴァラン人の長老が、彼の村のすべての住人達 30-40 人がここ（筆者注：基隆）に移住してもよいかと許可をもらいに来た。彼らは、もし我々が同意するなら自分たちの村を離れたがっている、というのは、ひどく飢えた *Poulecheron* 人がしょっちゅう彼らの村に略奪にやってきて、すでに何人かの首を彼らに取られたからである。我々は彼らに移住を許可した［Blussé & Everts 2010：307］。

ちょうどこの 4 日前にはバルビヤーン一行が、タラボアンへ向けて基隆を出航していた。つまり、タッキリ渓河口で *Poulecheron* 人とタラボアン人の首狩抗争が行われているのと同じ時期に、宜蘭北部でも *Poulecheron* 人によるクヴァラン人に対する首狩と略奪行為が行われていたことがわかるのである。

さらに 1659 年頃には、*Poulecheron* 人は宜蘭平原とその付近の住民に対しても攻撃をしかけて困惑を引き起こしており、宜蘭の政務員がゼーランジャ城当局に派兵を要請している［江樹生　2011　：379］。

1660 年、コイエット長官は、東インド総督への報告の中で、この宜蘭への派兵要求について次のように述べている。

宜蘭平原とタラボアンの間の山岳地帯の *Poelecheron* 人は、クヴァラン人に対する多くの兇悪犯罪に関与しており、この地域における栄えある会社の富の蓄積が少なからず妨害を受けている。ルニウス氏はクヴァラン人の提案に従うのが賢いと考えたので、兵士たちの小隊の派遣を要請した。・・・しかし我々はそれを行う決定を延期した、というのは、我々はその地域の情報をほとんど持っておらず、他の反対の理由もあったからである。［Blussé & Everts 2010：411］

このように、17 世紀に北部山岳地帯に住んでいた山地原住民は、*Parrougearon*、*Poulecheron*、*Pourousouron* 、*Poulo Seron*、*Poeleceron* などの綴りで記録され、綴りは少しずつ異なるが、おそらく同一の民族集団であり、ほぼ同一の名称で村の名前も指すと考えられる。

中村孝志は、*Poulecheron* という名称から見ると、伊能嘉矩が採集した単語から、クヴァランが山地の原住民のことを Purusaram と呼ぶ［伊能 1898：350］のに近いようだと指摘している。［中村 1991：203］。ほかに伊能の採集した単語としては、宜蘭の奇武老社、抵美社のクヴァラン語でそれぞれ、山の原住民を Pusarum と呼び、基隆社寮島のバサイ語で生蕃を Purusaraman［伊能・森口 1998：24］、または Penesorm［伊能・森口　1998：218］とも言う。一方、浅井恵倫が採集したバサイ語とトルビアワン語でも、山の生蕃をそれぞれ Purusaram に近い音（バサイ語： Purusarum、トルビアワン語： Pursarum）を用いている［Moriguchi　1991：219］ことが注目される。バサイ語および宜蘭のトルビアワン語、そしてクヴァラン語の中のこれらの呼称は、17 世紀にこれらの民族に接近して分布していた山地原住民の集団名、村落名に起源すると考えられる。そこで、*Poulecheron* と呼ばれるこの山地原住民が、タッキリ渓だけでなく台湾北部の山中に広く分布していたことがうかがえる。彼らの活動領域は、タッキリ渓周辺の山岳地帯から宜蘭平原北部、基隆にかけての山岳地帯に及ぶ広い地域であったと推測される。

二、*Poulecheron* 人と Mək－qaulin 人

１．タロコ人・タウサイ人と *Poulecheron* 人

オランダ人が訪れてからおよそ百年後、18 世紀半ばになると、中央山脈から東に移動してきたタロコ人が、タッキリ渓の下流域にまで進出し、タラボアン人を含む先住の人々を激しく攻撃し、タッキリ渓からの退去を強いたことは、様々な口碑によって知られている。そして、その前に *Poulecheron* 人はタッキリ渓流域の高山地帯からいなくなり、タロコ人に取って代わられていたのである。

タッキリ渓流域の「山里」（Bulexengun、ブレヒェグン）という場所は、そのやや複雑な発音から先住者の *Poulecheron* 人とのかかわりを想起させる。タロコの移動に関する口碑によると、タロコ、タウサイなどの原住民グループがタッキリ渓流域の山岳地帯に入ってきたことにより、このブレヒェグンと呼ばれた土地をめぐってこれらの人々の抗争が激化したと考えられるのであるが、それらの伝承は先住民との抗争については触れておらず、もっぱらタロコとタウサイの土地争いという説明になっている［台北帝国大学土俗人種学教室 1935：83-84、91-93］。

馬淵東一は、旧アタヤル系の民族の大移動の開始時期を 18 世紀初頭あるいは中期と推定、タロコやタウサイがタッキリ流域に来住したのは 18 世紀の半ば近くと推定し、それに先立って彼らの狩猟活動ならびに首狩り活動がこの流域の住民の脅威となり始めていたと推定している［馬淵　1974：497］。だとす

れば、タロコ・タウサイの狩猟活動が次第に広範囲に広がり始めたころ、まずかれらと最初に土地を争ったのは、タッキリ渓奥地の山岳地帯に住む *Poulecheron* 人であったはずである。そしておそらく 18 世紀の半ばごろまでに入れ替わりが起こったと推定される。*Poulecheron* 人の拠点の一つと推定されるブレヒェグンと呼ばれた土地はタロコによって占拠され、そしてブレヒェグンをめぐってタロコとタウサイが争い、やがてタロコがタッキリ渓下流域まで勢力を伸ばしてタラボアンの住民を攻撃し、ついには彼らをタッキリ渓河口付近から追い出すに至ったということになるだろう。

２．マッカオリンの伝説とカウカウ社の起源

Poulecheron 人がいつ頃どのようにしてタロコ人と入れ換わり、そして *Poulecheron* 人はその後どこへ行ったのだろうか。タッキリ渓周辺の山に住んでいた先住民については、馬淵東一、詹素娟らによる、日本統治時代に収集されたマッカオリン（Mək-qaulin）の伝説と、宜蘭の猴々（カウカウ）社の起源に関する伝承をもとにした考察がある。

馬淵は、口碑の研究から、セデク群が中央山脈を越えて東進した頃までタッキリ渓流域やその河口から北にかけて分布していたのは、セデク語で Mək-qaulin と呼ばれた先住民であると述べている。彼らはセデク群の進出に押されて陸路または海路で北方に去ったが、南澳蕃の口碑を参照して行方をたどれば、クヴァラン族分布の最東南端にあった猴々社（Qauqaut）にたどり着くと述べている。猴々社人自らも祖先がアタヤル族の圧迫で南澳蕃領域の東部山地（タッキリ渓流域に関して記憶なし）から蘇澳を経由して猴々に来住し村を建てたこと、アタヤル族が彼らを Qaulin または Qau-qaulin と呼ぶことを語っている。この称呼は Mək-qaulin にほかならない、と馬淵は述べている［馬淵 1974：300］。これが口碑による宜蘭の猴々社の建設に至る経緯である。

タッキリ渓を接点としたタラボアン社のトルビアワン人、山岳地帯のタロコ人、先住民とされるマッカオリン人の関係についてはその後も研究者の検討課題となってきた。そのなかで、詹素娟は宜蘭の猴々社の起源をタッキリ方面から移動してきたマッカオリン人と考えられるかどうか検討している。まず、時期であるが、『諸羅県志』（1716 年）の記事から、1710～1720 年の間にすでに宜蘭の南 1，2 日の行程のところに猴々社の存在があり、カオリン人はこの時期に宜蘭の比較的近く、おそらく大南澳のあたりに集落を形成していたと考えている［詹 1995:68］。そして、詹素娟はさまざまな口碑を比較し、さらに言語学、考古学上の研究結果から総合して、マッカオリン人はクヴァラン人やトルビアワン人と種族来源上の関係はありそうだが、独特の言語、風俗、文化を持った特殊な族群であると考察した。そして、猴々社の前身であるマッカオリン人は、タッキリ渓にいてクヴァラン人やトルビアワン人と同源の族群だった

と考えている［詹 1995:61-72］。

これらの研究は、何れも FE の資料修正と英訳によってオランダ資料の詳細が明らかになる前のものであり、そのために Mək-qaulin と、オランダ人の記録に見える *Poulecheron* 人との関係がつながっていなかった。しかしこれまで述べてきたように、17 世紀中葉にタッキリ渓の周辺の高山地帯に居住していたのはオランダ人が *Poulecheron* と呼んだ人々であり、彼らこそがセデクの人々によって Mək-qaulin と呼ばれた集団のことであると考えてよいだろう。そして、わずかな根拠ではあるが、入れ墨の様式や抜歯の形式などの特殊性、そして 2 つの村はありながら恒久的な家を持たないとされる生活形態などから考えて、かれらはクヴァラン人、トルビアワン人とは全く異なる高山地帯を住処とする原住民であり、なおかつアタヤル・セデク・タロコをはじめ、そのほかの台湾の山地に住む原住民のどれとも異なる特徴を持つ人々であったと考えられる。

３．*Poulecheron* 人の村の名前

オランダ資料には、*Poulecheron* 人の村は 2 つと記されている。このうちの 1 つは、オランダ文献に現れる *Pourousouron*、（*Poulo Serong*）社であろう。クーロン人の村から 2 日の行程という点から見て、この村の所在地は、*Poulecheron* とよく似た発音の Blexegun（日本時代の山里、現在の秀林郷富世村下梅園）という場所ではないかと推定される。

もう 1 つはバルビヤーンたちが船の上から見た清水断崖後方の山の高いところにある村であろう。セザールはタラボアンから 7 時間の行程の山の中にある村の名前を、*Soukou* と記録している［Blussé & Everts 2006：30］。これがおそらくバルビヤーンらが見た山の上の村の名前であろう。村の名前はオランダ語表記であり、ou をオランダ語読みにすると［au］［u］などと読める。17 世紀はオランダ語の綴り方の規則が確定していない時期であることから、どちらの読み方もありうる。したがって *Soukou* という名称は、スークーまたはサウカウとも読むことも可能である。特にサウカウは、宜蘭の猴々社の発音カウカウと近似していることに注目したい。筆者としてはこの *Soukou* という村が宜蘭の猴々社のもとになった Mək-qaulin または Qau-qaulin の人々の村であったと推測する。タッキリ渓近くの高い山に住んでいた *Soukou*（サウカウ）社の *Poulecheron* 人、つまり Mək-qaulin 人が、タロコ人に追われて北方に移住し、北に移住して最後は宜蘭平原部の南端に下りて猴々社を建て、もとの村の名前を宜蘭の新しい村に付けたと考えられる。さらに、*Soukou* の綴りは、タラボアン人から間接的に聞いた名称を、オランダ人の耳で聞き取って書き留めたものであるので、本来の発音はサウカウではなくてカウカウに近い発音だったかもしれないのである。

ところで、中村孝志は、オランダ文献中のこの村の名前を *Sonkou*（ツオンコウ）であると読解しており、FE のテキストとは綴りが異なっている。中村自身がハーグ国立公文書館で現物を見て解読したものであるが、17 世紀のペンで書かれた筆記体の文字の読解にあたって、中村と FE とでは、n と u の読み取りの解釈が分かれたようである。現物を確かめていないが（たとえ確かめたとしても、17 世紀のオランダ語の手書きを見て、どちらの読み取りが正しいのかの判断が難しいと予想される）、オランダ人のネイティブの複数の専門家が年数をかけて作業を行ったものであること、東インド会社の資料全体を解読した蓄積を背景としていることを考えると、FE の読解がより正確であると筆者は考える。したがって本論では、FE の方の解読結果を採用した。

また、これに関連して中村孝志は、ツオンコウという村は、アミ族がアタヤルを指す語、ツンガオ（中国語表記では崇爻）と対応し、*Poulecheron* 人が、口歯損傷、黥面、馘首などの風習の点からは原住民族セデク族のうちの木瓜蕃にあたるのではないかとしている［中村　1991：203］。しかし、これらの習俗はいずれも木瓜蕃に限らず台湾原住民の一部に行われていた習俗であり、*Poulecheron* 人が木瓜蕃だったという根拠としては十分とはいえない。また、木瓜蕃の移住時期や分布地域と比較しても、*Poulecheron* 人の存在時期や地点と一致しないのである。

ところで、言語学者の研究によれば、カウカウ語の残存資料はきわめて少なく、ただ 1 から 10 までの数字 10 個だけであるが、カウカウ語の第二母音およびその後ろの子音が脱落する現象が認められる。この純粋の言語資料から見て、カウカウ人の言語はミクロネシア語の特徴と共通する一方、台湾各種のオーストロネシア語には同じ特徴は見られないという［浪越　1924：76-77、李壬癸 1992：227］。つまり、カウカウの言語は、タイヤル・セデク・タロコのどれとも異なり、また台湾のオーストロネシア語のどれとも異なるものであった。

まとめに代えて

17 世紀のタッキリ渓河口周辺に焦点を当てると、その地域が平地の原住民と高山地帯の原住民の接点にあたる場所であったことが分かる。砂金を集めるタラボアン社のトルビアワン人、ダダン人、パバナン人、定期的に船で交易にやってくるバサイ人、山岳地帯を生活圏とする *Poulecheron* 人やタロコ人などが、それぞれの利害に従って生活を営んでいた。タロコ人以前の先住民である *Poulecheron* 人は、オランダ資料によってある程度その概要が明らかになった。断片的な情報による限り、かれらの習俗や言語は、これまで知られている台湾原住民とは異なる独特のものである。したがって、*Poulecheron* 人がセデク、タイヤル、木瓜蕃などの直接の祖先であるよりはむしろ、同じ高山地帯にすむ民族ではあるが、ある程度系統の異なる人々であったと考えるべきであろう。

そして、17 世紀半ばのほぼ同時期に、*Poulecheron* 人はタッキリ渓河口だけでなく宜蘭平原北端の抵把葉社はじめ宜蘭の村々などにも攻撃を行っていた。彼らの村は 2 つだけ、という記録からみても、拠点となる村を遠く離れたところまで首狩攻撃をも含めた彼らの生活上の諸活動のテリトリーであったということになる。

本論では、オランダ資料を基にして、17 世紀から 18 世紀にかけてのタッキリ渓周辺の族群関係を、*Poulecheron* 人を中心に見てきたが、*Poulecheron* 人の文化や社会の特徴、17 世紀当時から現代にいたるまでの歴史的な動向に関しては、解明されていない部分の方がはるかに多い。今後の研究では、さまざまな記録や口碑の断片、そして時には考古学的な研究結果をも丹念につなぎ合わせていく作業が求められている。清代の文献に焦点を当てて宜蘭移住後のカウカウ人の社会と文化を考察した李信成は、平地に住むようになったカウカウ人のクヴァラン化が急速に進んだことを分析している［李信成　2012］。今後この人々の文化社会の特性と周辺民族の関係がさらに明らかにされるためには、オランダ東インド会社の文献資料の一層の解読による族群関係の再構成はもとより、考古学の発掘結果など他分野の研究成果もふくめた照合が必要であろう。

＊本稿のオランダ語表記の解釈に関しては、東京大学史料編纂所松井洋子教授、日本大学経済学部岡本奈緒子准教授のご教示を得ました。この場を借りてお礼申し上げます。

参考・引用文献（日本語読みアイウエオ順）

《和文・漢文》

伊能嘉矩　1898　「宜蘭方面における平埔蕃の実査」『東京人類学会雑誌』147：345-350

伊能嘉矩著・森口恒一編　1998　『伊能嘉矩　蕃語調査手册』（台湾原住民資料叢書３）台北：南天書局

何廷瑞　1960　「臺灣土著諸族文身習俗之研究」『考古人類學刊』第 15・16 期合刊：1-4

江樹生（訳注）　『熱蘭遮城日誌』　第 4 冊　台北：台北市政府

詹素娟　1995　「宜蘭平原噶瑪蘭族之来源、分布與遷徒――以哆囉美遠社、猴猴社為中心之研究」潘英海・詹素娟主編『平埔研究論文集』41-76、台北：中央研究院台湾史研究所籌備處

台北帝国大学土俗人種学研究室　1935　『台湾高砂族系統所属の研究』刀工書院（復刻版、1988、東京：凱風社、1996　台北：南天書局）

中村孝志　1991「オランダ人の台湾探金事業再論」『天理大学学報』43（1）：197-211

浪越重之　1924「領台前噶瑪蘭の蕃務に就いて」『台灣時報』54：115-144。

馬淵東一　1974　『馬淵東一著作集』第 2 巻、東京：社会思想社

宮内悦蔵　1940　「所謂台湾蕃族の身体変工」『人類学・先史学講座 19』1-45、雄山閣出版

李壬癸　1992〈台灣平埔族的種類及其相互關係〉,《台灣風物》42(1)：238～211。

李信成　2012　「清代宜蘭猴猴人遷徒與社会文化的考察」『台湾史研究』19（1）：29-85、中央研究院台湾史研究所

《英文》

Blussé & Everts　2000　The Formosan Encounter: Notes on Formosa's Aboriginal Society: A Selection of Documents from Dutch Archival Sources, Vol. II:1636-1645, Shung Ye Museum of Formosan Aborigines, Taipei.

2006 The Formosan Encounter: Notes on Formosa's Aboriginal Society: A Selection of Documents from Dutch Archival Sources, Vol.III:1646-1654, Shung Ye Museum of Formosan Aborigines, Taipei.

2010 The Formosan Encounter: Notes on Formosa's Aboriginal Society: A Selection of Documents from Dutch Archival Sources, Vol.IV:1655-1668, Shung Ye Museum of Formosan Aborigines, Taipei.

Moriguchi, Tsunekazu 1991 'Asai's BasaiVocabulary', in Linguistic Materials of The Formosan Sinicized Populations I: Siraya and Basai, pp.195-257, University of Tokyo Department of Linguistics, 1989-1990 年度科研費補助金（A）研究成果報告書